



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	流水 : Lijiang
Author(s)	山村, 高淑; 伊藤, 清忠
Description	出典 : 鹿島建設広報誌 "Kajima" (2006年8月発行)、写真 : 伊藤清忠
Citation	Kajima, 200608, 18-19
Issue Date	2006-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38536
Type	article
File Information	200608_ryusui_Lijiang.pdf



流水

山村高淑

Lijiang

山村高淑
(やまむら・たかよし)

京都嵯峨芸術大学芸術学部助教授。
国立民族学博物館共同研究員。
地域開発論・ヘリテージツーリズム論専攻
1971年静岡県浜松市生まれ。
東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、
工学博士。中国、中東欧諸国を中心に、
世界遺産都市・集落の観光地化とその社会文化的
影響について幅広い研究活動を展開している。
おもな著書に『Indigenous Tourism: The
Commodification and Management of Culture』
(Oxford: Elsevier Science Ltd., 2005)、
『Tourism and Transition: Political, Economic
and Social Issues』(CABI Publishing, 2004)
(いずれも共著)、
おもな論文に「麗江古城の日常生活空間結構解析」
(木辻華編『活着的茶馬古道重鎮麗江大研古城』
民族出版社・北京、pp141-148, 2006年)、
「中国農村部における集落観光の開発方式と住民参与」
〔『国立民族学博物館調査報告』51, pp13-51, 2004〕
など



万年雪をいただく玉龍雪山から豊富な水が麗江に流れ込む

麗江旧市街地は流水の町である。

旧市街地から北へ約13km、標高5,596mの玉龍雪山から流れる地下水脈は、そこから12kmほど下って象山の麓で湧出し、黒龍潭という池をつくる。麗江の先住民であるナシ族は、800年前からこの水を旧市街地に引き入れ、地形を巧みに利用し、網の目のような上水道網を構築してきた。

したがって、麗江の町は地図をもたず、流水に沿って歩くのがよい。旧市街地の一番北側にある玉龍橋を起点にする。黒龍潭から引き入れられた水路はここから枝分かれし、旧市街地を潤していくから、雰囲気の良い水路を選んで気ままに歩く。大量の団体観光客に紛れて土産物屋の通りをしばらく進むと、いつの間にか周りに観光客の姿は消え、先ほどまでの喧騒が嘘のように、流水の音しか聞こえない路地に至る。水が奏でる風景とは、かくも美しいものだったのかと思う。

もちろん、迷路のような旧市街地に迷っても心配は要らない。ただひたすら流水に逆らって歩けばよい。すべての水路は玉龍橋を起点として、そこから枝分かれしているから、当然のことながら流水と逆方向に進めばこの玉龍橋に戻る。

流水は、麗江旧市街地の暮らしそのものである。

朝起きてまず水路から飲み水を汲む。調理前に野菜を洗う。もちろん食器洗いも洗濯も行われる。とくに「三眼井」と呼ばれる、飲み水の汚濁を防ぐために水路を3段階の池状に区切り、最上流部を飲み水の採取場、中部を野菜の洗い場、最下流部を衣類の洗い場として分割した施設は、その多様な用途から、一日中、人が途絶えることがなく、井戸端会議の場となっている。また一方で、水路を個人の住居に引き込み、台所や庭でプライベートに直接水利用ができる伝統的住宅もあり興味深い。

水路網の利用に関しては、昔からの伝統的な不文律がある。たとえば、「午前中の早い時間は飲み水を採取する以外の行為は禁止」、「ゴミ・痰・排泄物などは絶対に流さない」等、他の利用者に迷惑をかけないように、して良いこと悪いことについての暗黙の了解があった。こうしたルールによって、人々の生活のさまざまな局面で利用されながらも、水路網は清らかな流れを保ってきたのである。

ところが1990年代後半から、流水の著しい汚染が始まった。その背景には皮肉なことに世界遺産登録とそれに伴う観光客の急増がある。

1997年に麗江旧市街地は世界遺産に登録され、知名度が急上昇、観光客が急増する。一方でその登録を機に、町並みを保存するための規制が強化され、住宅の改築などもままならなくなる。こうした状況下、より現代的で便利な住宅、観光客の少ない静かな環境を求め、多くの旧市街地住民は新市街へ転出してしまった。そしてそれまで住んでいた住宅を、観光客相手に商売をしようと外部からやってきた人々に賃貸するようになった。その結果、旧市街地中心部では旧住民が著しく減少してしまう。

こうしてわずか数年間に居住者が大きく変わったことにより、旧来の水利用の不文律はうまく機能しなくなってしまった。レストランの厨房からは生ゴミが水路に投げ込まれ、土産物屋を掃除したモップが洗われ

る。観光客は水路に痰を吐き、タバコを投げ捨てる。さらには麗江観光記念に水路に鯉や金魚を放流するという行為が流行し、もともと魚など住んでいなかった水路にいまや魚が泳ぎ、観光客はこれに喜んで餌を与える……。

現在では流水を飲む住民はほとんどいない。新たに整備された水道インフラにより、蛇口をひねって飲み水を得ている。

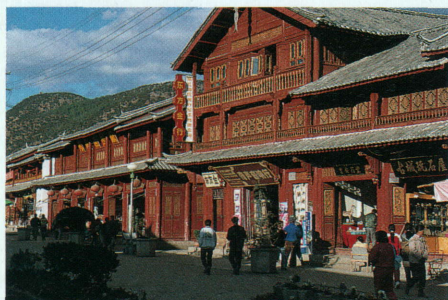
この麗江の流水に関する話は、歴史都市の保全が抱える課題を端的に示している。すなわち、都市空間は物理的には確かに保存・継承されている。しかしながら、その空間の用途と生活のなかの位置付け・意味は継承されていないのである。

都市空間を保全するために世界遺産と

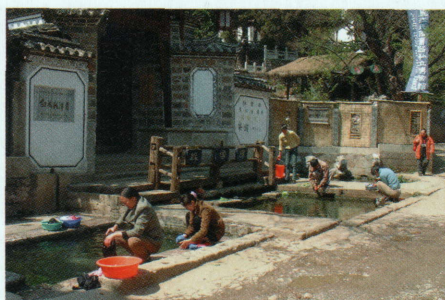
して登録する。その結果、観光業が隆盛化する。そしてそのことが都市空間の用途や意味を変えていく。もちろん、観光地化という道を探らずとも、人々の暮らし方は時代によって変化するから、空間の意味の継承を求めることは、単なるノスタルジックな感傷的行為なのかもしれない。しかしながら、空間の用途や意味こそが、その空間を維持・継承していく地域社会の伝統と知恵であることもまた事実である。

麗江旧市街地の住民もまさにこの点で悩んでいる。数年前から、自治会にあたる「居民委員会」は三眼井の前に掲示板を作成し、伝統的な水利用ルールの徹底を呼びかけ始めた。また麗江市政府は、今年の3月に、「麗江古城保護条例」を施行、水路の水を汚染した者に罰金を科すなど、具体的対策に乗り出した。その結果、徐々にではあるが、流水は美しさを取り戻しつつある。

世界遺産登録と観光地化という現象をどう受け止め、その負の側面をいかに乗り越え、プラスに転換していけるのか。新・旧住民を含めた地域社会、そしてわれわれ旅行者まですべてが真剣に考えなければならない課題である。



銀行や土産物店が入る建物。伝統様式を復興させた



コミュニティを生み出す三眼井 (写真提供: 山村高淑)



中河という小川が流れる中心地。生活と水辺が密着する



炊事・洗濯から飲み水までという、水路網のかつての姿を取り戻す動きがある